〝あいち国文の会〟のあゆみ（十四）

第一五回　本橋裕美氏（愛知県立大准教授）

文学に描かれた斎宮―古代日本の女性祭祀者―

（平成31・1・16）

「斎宮」は古代から中世にかけて伊勢神宮に奉仕した皇族女性を指す言葉である。『日本書紀』にすでに書かれ、『源氏物語』や『狭衣物語』にも個性を持った存在として描かれる。その背景には、都を離れる皇族女性であるがゆえの密通や託宣といった物語が底流しており、時に物語が史実を越えて描き出してしまうさまを論じた。

（本橋裕美記）

第一六回　赤羽一郎氏（愛知淑徳大非常勤講師）

立原正秋と朝鮮陶磁～『春の鐘』を読む～

（31・2・20）

日本の高度経済成長期と重なる昭和二十年代半ばから五十年代半ばに多くの作品を発表した小説家立原正秋（一九二六～八〇）の立ち位置を『春の鐘』を取りあげながら探ってみた。この際、私は彼を三対の相対峙する二面からなる正六面体、つまりサイコロの内という逃れられない空間をそれらの面にぶつかりながら生きてきた存在と考えることとした。

その相対する二面の一つは、〝韓国と日本〟である。彼は大正末年に韓国に生まれ、少年期に日本に渡り、戦後を作家として歩んでいる。彼は韓国人として姓名を公に認めたのは死の前年のことである。また彼自身が作成した韓国時代の年譜に事実と異なることが多いとの指摘もある。一方、彼が「風姿花伝」や「方丈記」などの中世文学に傾注していたことは、無常感への共鳴と考えられているが、日本人としての同化志向とみることもできよう。そのような彼は

晩年、解き放たれたように祖国韓国の風土・伝統を熱く語っている。『春の鐘』でも然りである。立原正秋は、「朝鮮人」「日本人」という民族を行きつ戻りつしていたのである。

二つ目は、〝純文学と大衆小説〟である。彼は幾度か芥川賞候補に挙げられながら受賞に至っていない。逆に昭和四一年(一九六六)に「白い罌粟」で直木賞を受賞している。純文学から出発し芥川賞を目指した彼にとって、大衆小説の頂点である直木賞を受賞したことは本意ではなかったかもしれない。彼は「純文学」「大衆小説」のはざまを行き来することになるが、このはざまの期間はさほど長くはなかったのである。まもなく彼は新聞や雑誌に小説を連載する流行作家になったからである。『春の鐘』も流行作家立原正秋の作品の一つである。

三つ目は、〝高麗青磁と李朝白磁〟である。立原正秋は『春の鐘』で、深い憂いに包まれた高麗青磁の雰囲気のなれそめから李朝白磁の明るく開放的な雰囲気の暮らしへと歩を進めようとする男女を描いている。この対照的なイメージを抱いている二つの朝鮮陶磁も、立原正秋という作家と彼が生み出した作品を語るうえで欠くことのできない相対するものと言えるであろう。

このように私は、彼を三対の相対峙する二面にぶつかる存在として語ってきた。しかし、相対峙する二面の間の〝関係性〟を放擲してきたという思いも断ちがたい。題名にある春の鐘を契機に李朝白磁の明るく開放的な雰囲気の暮らしへと歩を進めようとする男女にも、なお高麗青磁に宿るやりきれない寂しさが漂っているからである。〝韓国と日本〟〝純文学と大衆小説〟にもそのような思いがする。それは何故だろうか。

(赤羽一郎記)

第一九七回　片山　武氏(元金城学院大教授)

古學思問―鈴木朖の万葉集覚書―　(31・3・20)

本誌(十四号)七十頁参照

第一九八回　磯前睦子氏(フリーライター)

秘境遠山郷の昨日今日明日―天空の里・下栗を中心に―　(31・4・17)

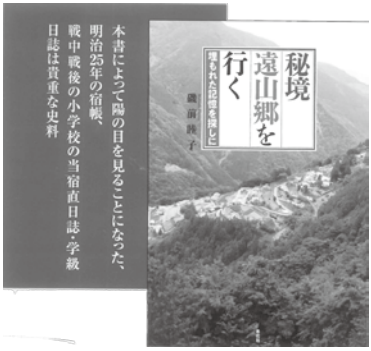
遠山郷は長野県の東南の端に位置する。東の

三千メートル級の南アルプスと西の二千メートル級の伊那山地に挟まれた狭く深い南北に続く谷筋は、中央構造線と呼ばれる大断層線であり、その線は太平洋と内陸を結ぶ天然の道であり古来から塩の道でもあった。その谷筋の一部、約二十五キロの谷が遠山郷である。外の地域と結ぶのはいくつかの限られた峠越えの道であり、隔絶山村とか秘境とか呼ばれる地域であった。長く下伊那郡上村と南信濃村の二村であったが、二〇〇五年に伊那山地によって隔てられている飯田市に編入合併された。合併により飯田市の面積は約二倍となったが、遠山郷の人口千八百人弱は飯田市民の一・七％を占めるにすぎない。

遠山郷の一つの地区である下栗は、標高千メートルの南斜面に九つの集落が横に点在し、百名に満たない人々が暮らしている。秘境と呼ばれてきた遠山郷の中でも、更なる隔絶性をかかえた地区である。静岡県側から南アルプスを越えてやってきた狩猟集団が定住したのが始まりとされる。田は一枚もなく、急斜面に貼り付くように家があり、昭和三十年代まで焼畑が行われていた。昭和四十年代になって、最奥の集落には昭和六十年になってやっと、車の通れる道が通じた。

二〇〇八年に下栗が、「にほんの里百選」に選ばれ、それを機に展望ポイントが作られそこに通じる遊歩道が作られた。閉校となった下栗分校の跡地が観光拠点となり、「天空の里」「天下の絶景」と少しずつ注目されてきた。二〇二七年予定の中央リニア新幹線開通後は品川飯田が四十分で結ばれ、飯田から車で一時間のこの地は東京からの日帰り圏となる。人口減は相変わらず止まらないが、地元では「秘境の観光地」としての発展に期待を寄せている。

（磯前睦子記）



令和二年三月　冬花社より出版

第一九九回　中根洋治氏（中日文化センター講師・郷土史家）

縄文時代の巨石文化　（令和1・5・8）

日本の巨石文化は「磐座（いわくら）」に代表される。人が亡くなったらその魂は霊山や磐座から昇天すると考えられた。

巨石文化の中には、磐座の他、環状列石（ストンサークル）、立石（メンヒル）、鏡岩などがある。

磐座の代表的なものは、豊田市岩倉町の山頂、三河一宮本宮山の山頂にある国見岩と岩戸神社の一対の大磐座など数多くある。

環状列石は、豊田市の足助地区の今朝平遺跡や小牧山の山頂にある。小牧山は現在「転落石」の看板を立てている。

最近、新種の「一列線状列石」を発見した。それは三重県南伊勢町の山の中で、長さ三十メートルから五百メートルの六箇所である。この種の列石はフランスにあるが、日本では今のところここだけである。　（中根洋治記）

第二〇〇回　安藤晴彦氏（愛知県立大名誉教授）

明治の〝死〟―漱石「こゝろ」のこと、など―　（1・6・19）

記念すべき二〇〇回を聞きつけて朝日新聞（二〇一九・六・一七）に掲載された記事と愛知県立大学学報（二〇一九・VOL04に載せられた記事を紹介します。

9　社会　4版　2019年(令和元年)6月17日(月)

愛知県立大「国文の会」200回

多文化共生の時代に

「相手を知り自分を知る」

国文学研究の振興を広げようと愛知県立大学の教員らが19年前に始めた研究会「あいち国文の会」が、19日で200回を迎える。薗史学や哲学など人文科学系の幅広いテーマも扱い、「多文化共生」が叫ばれる今こそ、相手の文化を知り、自分たちは何者なのかを考える学問が重要」と説く。

幅広いテーマで

5月8日、県立大の長久手キャンパス（長久手市）で199回目の研究会が開かれた。郷土史家の中根洋治さんが「縄文人の巨石文化」をテーマに講演。参加した約30人が興味深そうに聞いていた。

あいち国文の会が始まったのは2000年4月。会の世話人で県立大名誉教授の野崎昭弘さん（81）らが、教えた学生が研究者仲間に声を掛けたのが始まりだ。当時は国公立大学の法人化をめぐる議論が盛んだった時期。この前後に人文科学系の学部・学科を再編する大学もあった。県立大の文学部国文学科（現・日本文化学部国語国文学科）は全国の公立大学でも教員層が厚かったが、その存続を危ぶむ声も出ていたという。

「名古屋市内から長久手市にキャンパスが移ったばかりで、国文学を研究することの意義を地域の皆さんに知ってもらう場が必要と感じていた」と野崎さん。

学生で注目される最新の話題や自身の研究テーマなど、各人が自由に発表、大学教師にとっては、研究者の視点で一般向けに話す経験を積む場でもあった。

元県立高校の国語科教諭で大学の名誉教授の山口成治さん（68）は、長年会の世話役を務めた一人。会の発初期を「参加者には、地域の文化的な蓄積に貢献した、いとの熱意があったと思う」と振り返る。

「重要性増した」

これまで年10回ペースで開かれ、近年は国文学に関心のある人文科学系の様々な研究をしている人を発表者に迎えている。無料で事前予約は不要。誰でも自由に参加できる。現役教員として会を見守る光敏教授の加藤武雄さん（38）は、「国文の会は、研究成果を社会に還元するアウトリーチ活動の一つ。会のあるもの、大学と地域社会をつなぐ重要な役割を果たしてきた」と語る。

大学院の博士課程を出て、研究職ポストに就きにくい現状で、人文科学系の研究者はこうした活躍にあるとされる。複数の非常勤講師などを経てこの春初めて常勤職に就いた加藤さんは、近年再び人文系の学問が注目されつつあると感じている。

「人文系の学問は、近年再び人文系の学問が注目されつつあると感じている。

「人文系の学問は、近年再び人文系の学問が注目されつつあると感じている。

学部に逆風が吹いている理由は、簡単に説明しにくい。ただ、人文系の学問は、現代の社会を見つめ直すことを教えてくれる。「国際化や多文化共生が叫ばれるこそ、相手の文化を知り、自分たちは何者なのかを考える学問が重要」と説く。

あいち国文の会が始まったのは2000年4月。会の世話人で県立大名誉教授の野崎昭弘さん（81）らが、教えた学生が研究者仲間に声を掛けたのが始まりだ。当時は国公立大学の法人化をめぐる議論が盛んだった時期。この前後に人文科学系の学部・学科を再編する大学もあった。県立大の文学部国文学科（現・日本文化学部国語国文学科）は全国の公立大学でも教員層が厚かったが、その存続を危ぶむ声も出ていたという。

「名古屋市内から長久手市にキャンパスが移ったばかりで、国文学を研究することの意義を地域の皆さんに知ってもらう場が必要と感じていた」と野崎さん。

学生で注目される最新の話題や自身の研究テーマなど、各人が自由に発表、大学教師にとっては、研究者の視点で一般向けに話す経験を積む場でもあった。

元県立高校の国語科教諭で大学の名誉教授の山口成治さん（68）は、長年会の世話役を務めた一人。会の発初期を「参加者には、地域の文化的な蓄積に貢献した、いとの熱意があったと思う」と振り返る。

「重要性増した」

これまで年10回ペースで開かれ、近年は国文学に関心のある人文科学系の様々な研究をしている人を発表者に迎えている。無料で事前予約は不要。誰でも自由に参加できる。現役教員として会を見守る光敏教授の加藤武雄さん（38）は、「国文の会は、研究成果を社会に還元するアウトリーチ活動の一つ。会のあるもの、大学と地域社会をつなぐ重要な役割を果たしてきた」と語る。

大学院の博士課程を出て、研究職ポストに就きにくい現状で、人文科学系の研究者はこうした活躍にあるとされる。複数の非常勤講師などを経てこの春初めて常勤職に就いた加藤さんは、近年再び人文系の学問が注目されつつあると感じている。

「人文系の学問は、近年再び人文系の学問が注目されつつあると感じている。

学部に逆風が吹いている理由は、簡単に説明しにくい。ただ、人文系の学問は、現代の社会を見つめ直すことを教えてくれる。「国際化や多文化共生が叫ばれるこそ、相手の文化を知り、自分たちは何者なのかを考える学問が重要」と説く。

あいち国文の会が始まったのは2000年4月。会の世話人で県立大名誉教授の野崎昭弘さん（81）らが、教えた学生が研究者仲間に声を掛けたのが始まりだ。当時は国公立大学の法人化をめ

❶あいち国文の会」を支える野崎昭弘さん（前列右）、加藤武雄さん（後列右）＝長久手市　❷「あいち国文の会」の第199回研究会の様子＝5月8日、県立大長久手市

「あいち国文の会」二〇〇回を迎えて

―野崎典子（愛知県立大学名誉教授）―

"あいち国文の会"の発端は、野崎が、退職後も研究会を続けたいと同僚の小谷成子氏に呼びかけての個人的な思いが働いてのことでしたが、時は恰も日本の大学に法人化の波がおし寄せて、人員削減をはじめ学科の存続も危ぶまれる時期にあたり、国文学科の教員・同窓生は先を憂え、この荒波に耐えて要綱することなく、国文学を楽しみ、研究できる場を確保しようと誓めたのです。そして最新の研究成果を一般の文学愛好家にも及ぼし、知的な刺激を受けて生涯の勉強を始めるきっかけとなり、それが生きがいとなればすばらしいことと思ったものでした。

記念すべきものを挙げれば、

第一回

高木史人氏（名古屋経済大）「犬山周辺の伝承をめぐって」（平成一二（2000）年九月六日）

第五〇回

四辻秀紀氏（徳川美術館学芸員）「王朝の貴人の美意識―源氏物語絵巻を中心に―」（平成一七年（2005）三月九日）

第一〇〇回

島津忠夫氏（大阪大学名誉教授）「日本文学―作品の成立と読伝本―」（平成二一年（2009）九月九日）

第一五〇回

荒木浩氏（国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授）「古典の中の〈世界〉／世界の中の〈古典〉―土佐日記・源氏物語・今昔物語集をめぐって―」（平成二六年（2014）五月二八日）

第二〇〇回

安藤靖彦氏（愛知県立大学名誉教授）「明治の"死"、一茶・石「こっろ」のこと、など―」（令和元年（2019）六月一九日）

（以上の肩書きは当時のもの）

これまで、会員資格も問わず、会費もなく、国文学ファンならだれでもというオープンな姿勢が広く支持を得て、地域住民の積極的な参加もあり、平成一九年には会誌"あいち国文"第一号を発刊し、現在は一三号（令和元年九月刊行予定）を編集中です。

"あいち国文の会"の将来について、あと何回まで続けられるものか、出来る限り続けたいと思う一方で、いつでも終えることが出来る自由も持っています。しかし、やはり、その将来は、会を支えていただいている一人一人の思いに懸かっていると思っております。

鵡籠中記』を書き続け、元禄時代の名古屋を語るうえの貴重な資料を残した。

今回は、朝日文左衛門を知るための入門編で、まず江戸時代の通称と諱をとりあげ、通称の方はしばしば改名されるとし、ちょうど文左衛門から定右衛門に変わったころ、自宅近くの平田町で、万五郎様（のちの七代藩主宗春）の初めての江戸下向をお見送りし、そのとき親しくお声がけを頂いた。その場面を日記から引用し、改名のため、ときに名前の混乱を来たす可能性のある事を語った。

次に朝日家の「百石知行取り」の内容について、今の給与と比較しながら、具体的にのべた。

（大下　武記）

第二〇二回　大下　武氏（東海学センター理事）

朝日文左衛門の日記

（1・7・10）

元禄・宝永・正徳の時代、尾張藩の百石知行取・御城代組同心の家に生まれた朝日文左衛門は、五年のお城番ののち御畳奉行を拝命した。勤務についていた二六年余、欠かさず日記『鵡

第二〇三回　服部直子氏（愛知県立大非常勤講師）

追善集の諸相―名古屋を中心として―

（1・9・18）

追善集とは、「師友、父母などの死や、その年忌に際し、故人を追慕して編まれる撰集」（俳文学大辞典　雲英末雄氏稿）である。江戸期において俳諧の世界では、中でも芭蕉を追慕し、

その事業（追善のパフォーマンス）、また追善集の刊行が蕉風を広める大きい力となった。

名古屋においては、芭蕉追善集としては様々の俳書が刊行された。芭蕉直門の人々が一周忌などに刊行したものと異なり、尾張蕉門を自称する月空居士露川は、諸国の芭蕉門人と交流し、宝永七年（一七一〇）近江の正秀と共に義仲寺において十七回忌追善の千三百韻興行を行い記念集『不断桜』を刊行した。享保十一年（一七二六）芭蕉三十三回忌には、露川（佐屋の門人達に編集させた『此原』）のみならず、支考門の以之による『むつのはな』、越人の『みつのかほ』がある。没後四十年に際しては、佐屋の露川門は「水鶏塚」を建立。芭蕉画像を付して追善集『水鶏塚』（享保二十年）を刊行した。

さらに、寛保三年（一七四三）芭蕉五十回忌には、多くの蕉門はもはや死去しており、この年露川も死去する。そこで新たに刊行されたのは、大曽根成就院に三日月塚を建立して記念とした五条坊三径編『秋の昔』、諸国の芭蕉ゆかりの塚にちなみ、句を並べた反喬舎巴雀編『七塚供養そなたの空』である。三径（木児とも）も巴雀は本来古風の東鶯門であるが、名古屋城下から周辺へと門下を拡大し、巴雀には武士層の門人も多かったところから、諸国の趨勢をも鑑み、蕉風を標榜することが俳壇の主流ということだと確信したのであろう。（服部直子記）

第二〇三回　早川厚一氏（名古屋学院大名誉教授）

半井本『保元物語』の山田小三郎是行譚を読む

（1・10・16）

半井本に、重複や類型あるいは同型描写の繰り返しが見られることは、既に指摘があるが、それが物語としての構成意識の希薄さや不手際に必ずしも収斂されていかないことは確かである。初めに、二箇所を取り上げ論じたが、一見半井本の構成意識の希薄さや不手際かとも見られるような記事や、重複や類型あるいは同型描写の繰り返し記事も、緻密に構成された物語であることを、以下、山田小三郎是行譚を中心に考えようとした。

初めに、是行が、味方の全員が為朝を恐れ退却してしまった後とは言え、なぜ一人で為朝に挑みかかろうとしたかを考えた。その理由として、三点考え、具体的に考証した。

次に、是行は為朝の内甲を射たはずなのに、なぜ弓手の草摺に当たったと記されるのかを考えた。それについては、是行の射た矢は、為朝の屈継に当たったとする文保本の形態が古態であろうが、それが、半井本で「弓手ノ草摺」に当たったとされる理由、さらには宝徳本では屈継に当たったとして記される理由について考えた。

最後に、為朝は、是行の乗る鞍の前輪と是行の草摺を射抜き、さらに尻輪で止まるような矢をなぜ射たのかを考えた。伊藤譚では、伊藤五の左袖で止まるような矢をわざと射、是行譚では是行の草摺を射抜いた後、尻輪で止まるような矢をわざと射たと考えた。その理由について具体的に考えた。

以上からしても、伊藤譚と是行譚とは、為朝の破壊力と命中率を描く物語という側面を持っていることを最後に指摘した。（早川厚一記）

第二〇四回　安藤靖彦氏（愛知県立大名誉教授）

明治の〝死〟―漱石「こゝろ」のこと、など―2

（1・11・20）

第二〇〇回の続篇